

生命(いのち)のにぎわいとつながり

千葉県は温暖で湿潤な気候で、海、川、湖沼、谷津田、低湿地といった多様な水辺に恵まれています。このような房総半島では、約4万年の昔から人々が暮らし、様々な生物を食料や燃料、日々のくらしの道具や家屋の材料などに利用し、土地本来の生物多様性を守りつつ、人々は持続的な生活・生業を営んできました。



この自然の中での人々のくらしによってもたらされた自然環境を里山、里海と言い、集落を中心に、田畑や湖沼、森林や沿岸海域の自然といった多様な土地環境がモザイク状に形成されていきました。また、これらの環境にくらす生物や人々は、山〜川〜海といった連続的なかわり合いを持ち、そこでは人々や物、生物の流れが見られます。

(1) 里山の自然

下総台地の里山では、台地上の畑、谷に続く斜面林、谷には湧き水と水田、そして農家の集落が見られます。里山では食事を作るための燃料として斜面の薪炭林*を利用し、畑の肥料にするために落ち葉を利用してきました。人々がこのように林の野草を利用することによって、春先にカタクリなどが花を咲かせることができるのです。さらに、谷の湧き水は、水路を通じて谷津田に水を供給しますが、この水路は魚やカエルなどのすみかとなるのです。



カタクリ



ニホンザル

(2) 房総丘陵の自然 —サルやシカのいる森—

千葉県には高い山はありませんが、房総半島の南半分には房総丘陵と呼ばれる入り組んだ谷と深い森があります。その中に人が古くから生活している小さな村があり、川沿いや山の斜面を切り開いた水田や畑があります。山は材木や燃料を得るなど、人の生活ととてもかかわりの深い場所でした。尾根道*をたどると、思いがけないところにお寺があったり、炭焼きの跡があったり、人の生活の跡が見られます。房総丘陵の多くは里山で、人の手があまり入らない奥山と呼ばれているところはわずかです。

房総丘陵を特徴づけるのは、冬でも葉をつけたままの常緑広葉樹の林です。房総丘陵の太平洋に近い東の方に清澄山があります。ここではスタジイやアカガシなどの常緑広葉樹の林の中に、見上げるような大きなモミヤツガなどの針葉樹も見られます。一方、西の方には高宕山があります。「天然記念物高宕山のサル生息地」で有名なところ。この周辺は炭焼きが盛んに行われていたこともあり、コナラを中心とした落葉広葉樹の林がまとまって見られます。ほとんどは一度伐採されたことがある林ですが、中には人の手が入らず、ヒメコマツのような希少植物が残っている場所もあります。

*用語解説) [薪炭林] 薪や木炭の原料をとる林のこと。クヌギやコナラなどが使われる。
[尾根道] 山の連なりの高いところにある道のこと。動物や人が移動に使う。